

# Eureka XII

六年制通信 No.3 令和6年4月19日(金)号

## 科学と文学

ものが「わかる」とはどういうことか。これも昔から話題にされることですが、なかなか難しい問題ですね。英単語では、その語の持つイメージが対立する語を示すことによって鮮明になるということがあります。例えば有名なところで **right** を考えてみましょう。これを **duty** (義務) と対立させると「権利」という意味になり、**left** (左) と対立させると「右」、また **wrong** (間違っている) なら「正しい」という意味になります。**right** 一つを覚えるよりも、周辺の対立語と一緒に覚えた方が **right** そのもののイメージがよくわかります。こういう、二項対立によって意味を理解していくのはよくありますね。神の存在を信じる、ということは同時に悪魔の存在を信じることになる。神とは何か、それはすなわち悪魔ではないもの、悪魔とは何か、それはつまり神ではないもの、そういう相反するものを二項対立と言います。昼と夜、男と女、明と暗、どちらも一方はもう一方ではないもの、ということになります。

二項対立は西洋の発想だろうと思っていましたが、東洋には「陰と陽」がありますね。これ、西洋なら「陽と陰」という順番でしょうけど…。ま、そんなことはともかく、わかる、とか理解するというのはどういうことなのでしょうね。語源的には「わかる」は「わける」つまり小さく細かくするということなのでしょう。ラジオなんか、よく分解したのですが、これ以上分けられないというところまで分けて、初めて対象が理解できる、そういうことなのでしょう。そう言えば、昔習って感動したのですが、原子を意味するアトム (**atom**) はこれ以上分割できないものという意味です。鉄腕アトムのアトムですな。**atom** の **a** は **not** の意味。否定語ですね。**tom** は古典ギリシア語の **tomos** (=cutting) から来ていますから、要するにこれ以上細かくできないものである原子をアトムと名づけたのですね。

理解も「分ける」とよく似ています。「理」は、昔何かの本で読んだのですが、最もよく意味を反映しているのは理髪店や理髪師だそうで、髪にクシを入れてきれいに筋をつけることが「理髪」なのです。ですから「理」には「筋目をつける」、きちんと「分類する」という意味があります。「解」は字から十分に推測できるでしょうが「わける」、「ほどく」、「ときはなつ」ですね。解の字の入った言葉は分解、解散、解答、解熱などたくさんあります。そうすると、理解するというのは、細かく分解していった分類することなのでしょう。なるほど、そういう面もあると思います。

少し寄り道かもしれませんが、一見相反する言葉のように見えてそうではないというのがあります。それが文と武ですね。わが校の建学の精神は水戸学の「文武不岐」

から来たものです。これは文と武は分けるものではないという発想でしょうが、この言葉も解釈が非常に難しいですね。文なき武は武にあらず、武なき文は文にあらずという意味なのか、つまり文だけではだめだし武だけでもいけないというのか、それなら文武両道と全く同じ意味なのか。あるいは文を修めることも武を極めることも目指す人間像は同じこと、文を修める、つまり学問に邁進することによって、たとえ武に通じていなくても武士道を身につけることもできるといった意味なのか。こういう、解釈する側が試されるような言葉は深みがあっていいですね。そう思いませんか。

私は「細かくすればわかる」には大いに疑問を持っています。細かくするというのは科学の領域です。科学は物事や現象を解明するのが使命ですから、そこに人間の解釈は入り込む余地がありません。しかし文学にはむしろその逆の視点が必要だと思っています。文学というのは人間の感性の問題ということです。例えば、雲や虹や、小川を流れる清流も科学の目から見れば、すなわち細かく分解すればすべて H<sub>2</sub>O に過ぎません。どんな虹かいわし雲なのか積乱雲なのか、清流か濁流か、大河か小川か、それらが私たち人間とどのようにかかわってきたか、それらを舞台に人間はどんな物語を紡いできたか、そういったことは科学には無縁です。科学は解明しますが、人とかかわりを解釈する力はありません。虹を見て美しいと思う私たちの心は科学の解明を拒んでさえいるように思えます。科学は物事に接近しますが、文学は物事を理解するときに俯瞰します。全く違うアプローチですよ。君たちはどう思いますか。

#### 今週のおすすめ

・夕木春央 『十戒』 (講談社)

『方舟』の次は『十戒』でしょう。これ、パソコンで「じっかい」と打たないと出ませんね。「じゅっかい」では十回がでます。実に正しい。パソコンもやるやん。

さて、今回もクローズド・サークル内での殺人事件。小さな無人島が舞台。ここを観光地として活用できないかと訪れた九人の男女が体験する恐怖の、そして大変奇妙な数日間の物語。最初の殺人事件の時に犯人から十戒が提示される。守らなければならない十の掟ですね。その中には「犯人を捜してはならない」というのがあって、それを破ると殺されてしまう。殺し方は島で見つかった大量の爆薬で。

『方舟』を先に読むことをお勧めしますが、読んだら読んだであのレベルのどんでん返しを期待してしまいます。で、私の感想としてはトリックは普通ですがどんでん返しは読者を満足させると思います。特に『方舟』ファンにはたまらないだろうな。ただやはり、人物設定というか、そもそもその大量の火薬で何がしたかったのかとか、彼らは一体どういう関係で繋がっていたのか、とか物語の深みにチト欠けるきらひがありますね。『方舟』の時と同じ感想で恐縮ですが、このアイデアを倍ほどの紙面を使って東野圭吾が書いたらどうなるか、読んでみたいと思いました。

ちなみに、これは私の推測ですが、夕木さんは『方舟』書き上げた時に今回のラストをイメージしていたように思います。皆さんの感想が知りたいですね。

BGMは Andy Williams の *Love Story* でした…。